

今週の遺言 大橋巨泉

Will On This Week / Kyosen Ohashi

第284回

世界的問題になっている 安楽死の法制化よりカジノ？ 政治家の怠慢でなくて何だ！

憶 えていますか？ ボクはこの夏、このコラムで、2回にわたってカナダの老女の安楽死について書いた。84歳の認知症にかかった女性が、自分で判断がつく内にと、自ら命を

ク州では安楽死を合法とする法案が可決されていた。あれから3ヶ月ほど経つが、今度はアメリカ合衆国で、安楽死に関する事件が二つ起った。ひとつは29歳の女性で、予告通り11月1日に安楽死を遂げた。そのために一家は、合法化されているオレゴン州に移住していた。一方19歳のバスケットボール部員の女性は、試合に出て、生き続ける」と宣言している。彼女は重い脳腫瘍で、余命1ヶ月だという。

このコラムは、比較的議論になりそうな事を多く書くので、読者からよく御意見をいただくが、この問題に関しては、今のところ全く反響がない。多くの人は、自分と死を結びつける段階（年齢）に達していないのかも知れない。しかし人間は必ず死ぬのである。生れてくる時は全く選択肢のない人間だから、せめて死ぬ時くらい自分の意思を反映させたいという考え方はある筈だ（一方死ぬ時もノーチョイスで自然に、という考え方が当然。ただ他の先進国に比して、そうした議論が極端に少ないのが日本である。

大体安楽死と尊厳死の区別さえさだかになっていない。ボクの理解では、医師の調合した薬で命を

絶つて病の苦しみから逃れるのが安楽死である。そしてすでに直る希みのない病気で、延命装置で植物的に生きている患者から、装置を取りはずすのが後者だろう。ボクの住んでいる諸外国では、本人の遺書や家族の要望があれば、後者は犯罪にならない国や地方自治体が多い。

ボク個人の体験も大きい。それまでは生きられるだけ生きようと考えていたボクの考え方が変わり出したのが、2度目の癌にかかってからだ。中咽頭がんを手術すると、顔の形が変わる、声を失う、嚥下力が低下するなどのオソレがあると言われ、考えこんだ。そしてそれらの「生活の質」を保つために、手術を回避し、放射線治療の道を選んだ。そのために今だに副作用に苦しんでいるが、選択は間違っていないかったと思っている。人間はただ生きるのではなく、ある程度のクオリティーとデイクニティ（尊厳）をもって生きるべきだと考えた。

いつも書くことだが、長い間狭い国土に、同一民族が暮らして来た日本では、「周囲に気を使う」なるべく皆の意見に従う」といった、いわゆる「空気を読む」習性が身につけてしまっている。若いころ

から西欧の合理主義を信奉して来たボクは、長い間「巨泉の外国かぶれ」などと言われて来た。しかし今の日本の窮状を見ると、ボクは間違っていないかと思う。給料は上らないのに物価は上がるという、最悪の状況にありながら、安倍内閣の支持率が50%を超えているなんて、全く信じられない。

この安楽死の問題も、まさに政治の怠慢なのである。考えてみると良い。貴方が医者で、癒るアテもなく苦しんでいる患者を抱えている。家族からも、薬にしておいて下さいと頼まれる。貴方は放っておきますか？ 現在の法律では、もしあなたが安楽死の手段を講じたら、逮捕され有罪となり、罰せられるのだ（執行猶与はつくだろうが）。日本は、地方自治が未熟で自治体の権力が弱いから、アメリカやカナダのように、州によって認められるという事がない。つまり患者は苦しむだけ苦しんで死ぬ（必ず死ぬんですよ）、医者は良心を殺して、見て見ぬふりをする。

れが立法府の怠慢でなくて何であろう。良心より目先の欲にかられる議員たちは、こんな大切な法案を提出するより、問題の多い「カジノ法

絶つた話である。大変知性の高い女性で、最後を看取ってくれた夫に迷惑がからぬよう（自殺補助にならぬよう）、すべてを自分で行った。この報道の前から国中の議論は高まっております、すでにケベッ

案」の方を優先している。ある調査では、「もし合法化されたら、貴方は安楽死を選びますか？」という質問に、何と72%の人が「イエス」と答えている。ボクの考えでは、宗教的制約の少ない日本は、諸外国より、ずっとこの問題の法制化は楽だと思っただが



絵/松本圭以子

癌は今や、日本人の2人に1人はかかるという。そしてこの病気と医学の進歩は、人類に死についての新しい命題をつきつけている。更に高齢化による認知症の蔓延は、別の角度から、命の尊厳や死についての新しい考察を迫っている。それはいつまでも「周りの空気を読んで」いては、決めら

れない問題である。前述の72%という数字は、「合法化されたら」という条件が生んでいると思う。これでも立法府は動かないのだろうか？

土曜の夜、上海でのグランプリで、フィギュアスケートのエース、羽生結弦選手が、7針も縫う重傷を（アクシデントで）負いながら、フリーを演技して、2位に入った。事故の直後から、専門家は出場はムリだと言っていたし、簡単な治療後の練習でも、ジャンプが出来た状態ではなかった。それでも強行して2位に入り、号泣していた羽生の姿は、典型的な日本人のそれであった。

新聞なども「気力」を称える向きが多かったが、やはり「空気」だったのだろうか。そんな中で、日曜朝のテレビで、羽生は出るべきではなかった。コーチ陣が止めるべきだったと発言した大八木淳史君（元ラグビー全日本代表）の発言は光っていた。ころころ転んで跳べないようなプロは見たくない。羽生君、もっとチャンピオンの尊厳を大事にしなさい！

Will On This Week by Kyosen Ohashi